

第36回 ～牧口一二さんを囲んで～ のまとめ （最終版）

松井直哉

「養護学校義務化」の話の中で義務化には親が要求したという側面があるとの話になった。そのことで私が思う所を書いてみたい。

私がまだ学生だった50年ほど昔、先輩の務める小学校に見学に行かせていただいた時、学校が「サービス業」のような雰囲気になっていると思ったことがある。その後も学校はどんどんサービス業化していき、親の要求に応えるという部分が肥大化していったように思う。税金による公教育なのだから親の要求に応えることは悪くはないのだが、親の要求とはどのようにできてきたものなのだろうか。

「合理的配慮という言葉は好きじゃない。」

「不合理なことの良さを見つけよう。」

と牧口さんがおっしゃっている時、私はずいぶん以前、ある人から「役立たず」と言われたことがあったのを思い出した。そう言われた時の私の心境はさておき、牧口さんが54社から不採用にされたように、歩けないから「役立たず」、目が見えないから「役立たず」、しゃべれないから「役立たず」、点数を取れないから「役立たず」と「役立たず」は企業や社会から遠ざけられる歴史が続いてきた。現在は法律で一定の割合で障害者を採用することが義務とされているが、ひどい場合は数をごまかしたりだとか、できるだけ障害の軽い人材を採用しようとしていたりしているようだ。一般的には障害者は役立たずだから雇いたくないが法律で決まった以上形だけでも取り繕っておこうというところだろう。

そんな中、「障害」がある状態の我が子を前にして、「障害」をその子の問題として捉える親は多いのではないだろうか。その子を変える(治療する・鍛える)ことで「障害」を小さくすることができるかもしれないと思う。だから親はまず医療に期待をする。次に訓練、そして教育に期待をする。

親が子どもの学力を上げたくて塾に通わせるのに似て、教育によって障害が軽くなるなら養護学級(支援学級)でも養護学校(支援学校)でも行かせてあげたいと考えるのは不自然ではない。

また、例えばパラリンピックのメダリストをイメージして、特別の指導や環境を提供することでその子の能力を開発し延ばし、生きていく上での「障害」を小さくすることをイメージする。それがいいことなのか悪いことなのかは別にして。

(オリンピックやパラリンピックでよくある、メダリストが言う「夢を持ち続ければいつか叶う」というフレーズが私は大嫌いだ。)

また、そんな風潮に呼応して「一人一人の教育的ニーズに最的確に答える指導」などと謳う「特別支援教育」も罪が大きい気がする。

「教育的ニーズ」(親の要求)のかなりの部分が、個人や家族にかかった社会的風潮による圧力から起こったものだということを認識すべきだろう。「障害」の解決策を個人・家族に押し付けて社会を変えようとしないう社会自体が大きな問題なのに。

「期待される人間像」はもとより「学歴社会」「良い子・悪い子・普通の子」などと言った風潮の中で、社会の役に立つ人間、役に立たない人間、害になる人間と人間をランク付けして見るのが当たり前になってきたのはいつからだろうか。

人間は生きて存在することが素晴らしいと思える日は来るのだろうか。

などと考える機会になりました。